

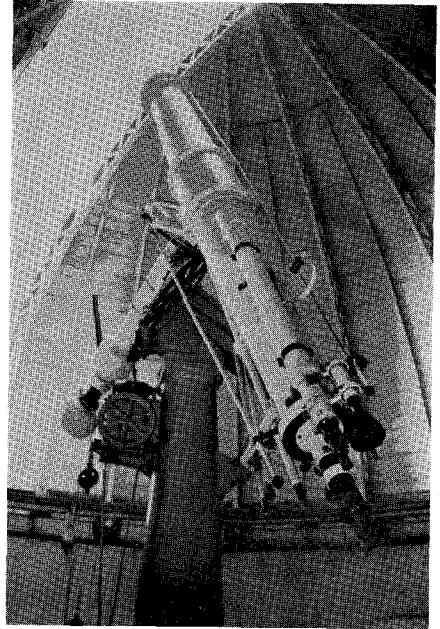
◇ 7月の天文暦 ◇

日 時	記 事
4 0	朔
5 0	地球 遠日点通過
7 8	水星 外合
21	月 最遠
22	小暑 (太陽黄経 105°)
11 4	天王星 月の 4°N 通過
12 5	上 弦
23	木星 月の 6°N 通過
19 5	望
20 7	月 最近
23 16	大暑 (太陽黄経 120°)
25 20	下 弦

クック 30 cm 屈折式赤道儀

1927年(昭和2年)6月、英国 W. ワトソン社を通じて購入した30cm屈折望遠鏡が京都に到着した。ピラーの銘板にはCooke & Sons, York, Englandとあり、製作年代は1900年前後であるらしい。クック社で緯度35°用に再整備の手を加えたものであるという。記録によれば「7月11日から9mドーム内で据付・組立の作業が行なわれ、20日午後2時完了と同時に「望遠鏡万才」を叫んで記念の撮影をした。」とある。当時本邦最大の屈折望遠鏡であった。花山天文台図書室に保存されているその写真乾板には、あるいは赤緯軸上に、あるいは観測台上にと、山本一清教授(故人)、荒木・上田両助教授、竹田講師(故人)、中村要氏(故人)がならび、さらには山村(現: 藪内)・森川・渡辺氏らいまはもう定年退官された先生方の若き学生の日姿など、諸先輩の当日のよるこびがうかがわれる。京都大学本部構内西南、現附属図書館の西側にあたる、旧宇宙物理学教室時代のことであった。すでにそのころはじまっていた拡張計画の進展につれて、1929年(昭和4年)9月東山連峰に新装成った花山天文台の主要設備の一つとして移転された。

クック 30 cm 望遠鏡による観測は、主として戦前は中村氏らによって小惑星・彗星の精密位置決定であって、戦後多くの困難の中に三谷哲康氏に引きつがれ、そ



の成果は「小惑星 1619 Ueta」に代表されるだろう。1955年(昭和30年)以後は宮本正太郎教授によって、火星大気の大循環、月面地質構造の解析等の物理観測に駆使され、TSUGAMI 60 cm 反射望遠鏡との協同同時観測のプログラムの下に、それぞれの長短相補う特色を發揮していた。その一部分は数次の火星接近時の報告、2度の月面写真図等として公刊されている。

天文台の長期計画と共に改装案が具体化して1967年ついに解体の日をむかえることになり、最後の観測の終わった8月17日、40年前の日にならって一同整揃いの上写真を取り別れを惜んだ。われわれの目の前から姿を消したのは年もおしつまった12月18日である。現在大ドームには従来からの駆動部に西独ツアイス社45cm屈折望遠鏡がのせられ、引きつづき惑星観測が行なわれている。はずされた30cmのレンズは4.5mの長焦点を利用すべく、太陽館の副観測装置に転用され、本年3月の日食にはメキシコへ遠征するなど、新しい分野の観測に効果をあげつつある。

写真は1964年1月撮影、加藤友一朗氏の御好意による。(斎藤澄三郎)

